

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

民族間関係を変えうる？ ツーチー基金会の慈善活動

篠崎香織（北九州市立大学外国語学部准教授）

クアラルンプール（KL）市内のジャランクチンからジャランクポンに降り、約2.7キロ進むと、左側に灰色の石造りの壮麗な建物（写真）が見えて来る。この建物は、台湾を本部とする仏教団体、台湾仏教慈済基金会マレーシア（Taiwan Buddhist Tzu Chi Foundation Malaysia、ツーチー基金会）のスランゴール・KL支部である。ツーチー基金会は台湾で1966年に設立され、現在では50カ国に支部を持つ。マレーシアでは、93年に最初の連絡所がペナンに設置され、それ以降、マレーシア半島部、サバ、サラワク両州に拠点を設置し、活動を全国に広げていった。マレーシア・ツーチー基金会に参加しているのは、主に華人系である。同基金会の活動は、主に華人系マレーシア人の参加者からの寄付によって支えられている。

ツーチー基金会は、仏教を信仰する活動を行うとともに、社会奉仕活動を積極的に行ってきた。人道主義に基づき、政治や文化、信仰の違いを超えて社会奉仕を行うことをモットーに、寄付活動、医療サービスの提供、教育支援、文化活動などを展開してきた。91年より国際的な災害支援活動を積極的に展開しており、世界各地の被災地にボランティアを派遣している。

マレーシア・ツーチー基金会も、これらの社会奉仕活動を積極的に展開している。マレーシアでは甚大な自然災害はそれほど多くはないものの、頻繁に洪水が発生しており、それら被災地にマレーシア・ツーチー基金会のボランティアが赴き、救援活動や支援物資の提供を行ったり、がれきや泥の撤去作業や清掃活動を行ったりしている。被災地には、マレー系居住者が多い地域も含まれる。また貧窮者や病人、高齢者を対象とした寄付活動や医療サービスの提供においても、学生を対象とした奨学金事業においても、マレーシア・ツーチー基金会は人道主義の精神のもと、民族や信仰を問わずに救いの手を差し伸べてきた。受益者にはマレーシア国内の様々な民族が含まれ、マレーシアに滞在する外国人も含まれる。

半島部では、貧窮者や病人、高齢者の救済や、奨学金の提供といった相互扶助は、基本的に民族の枠内で行われてきた。民族や信仰を問わず慈善活動を行うNGO組織などももちろん存在するが、ツーチー基金会のように宗教を基盤とする組織による慈善事業は、宗

教を同じくする人たちを対象とするのが一般的であった。半島部では宗教と民族が概ね対応しており、イスラム教はマレー系を扶助する枠組みであり、仏教は華人系を扶助する枠組みであり、宗教と民族の組み合わせがこれ以外のパターンを取ることはあまりない。

このことを踏まえると、仏教系の組織であり、華人系の寄付によって活動が支えられているマレーシア・ツーチー基金会の活動は、これまでの半島部における了解を超えるような活動であると言える。そうした活動が、提供する側からも、また提供される側からも受け入れられているのは、戦争や自然災害の被災者が世界のどこかで現れた時に、民族や宗教を越えて世界各地から支援の手が差し伸べられるようになった今日の世界のあり方と連動しているのかもしれない。マレーシア・ツーチー基金会の活動が、半島部の民族間関係を変える一つのきっかけになるかどうか、注目される。



マレーシア・ツーチー基金会スランゴール・KL支部、静思堂。2010年に着工し、14年に完成。総工費は8,000万リンギ（約22億4,700万円）と言われる。（筆者撮影）

<執筆プロフィール>

1972年、千葉県生まれ。学術博士。在マレーシア日本国大使館専門調査員などを経て、2009年より現職。日本マレーシア学会運営委員長。著書に『プラナカンの誕生—海峡植民地ペナンの華人と政治参加』（九州大学出版会、2017年）。